争論

プロ野球はオープン戦が始まり、いよいよ2019年のシーズン開幕が近づいてきた。日米の野球を知り尽くす２人に、日本のプロ野球の問題点を論じてもらうと同時に、どうすればもっと面白くなるか、改善策を聞いた。

「プロ野球もっと面白く」

問題点と改善点は

勢力図変化、多極化時代

神田　洋氏
江戸川大教授

―最近、日本のプロ野球で気になったことは。

「２００９年に広島のマツダスタジアムがオープンした。総天然芝で屋外開放型。米マイナーリーグの球場を参考にした。大リーグのサイズでは、あまりに規模が大きいからだという。結果は年間２００万人超の観客動員という成功だ。そしてそれは、プロ野球界の勢力図が変わっていることの象徴でもある」

―勢力図の変化とは。

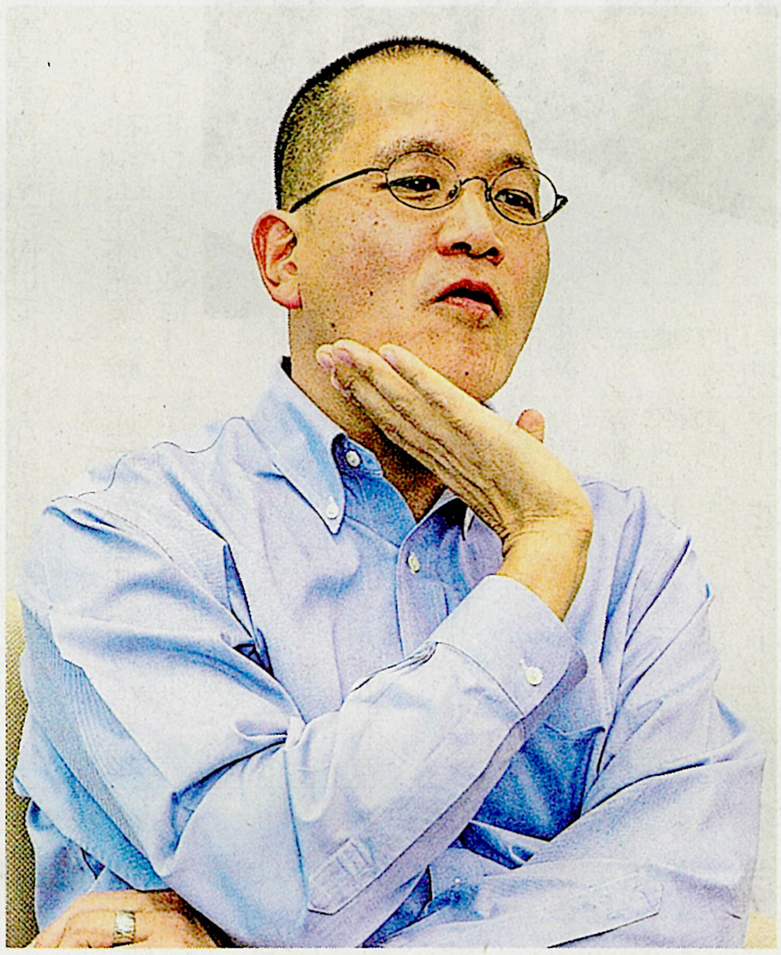
「巨人から広島に長野久義選手が人的補償として移籍した。年俸2億円を超えるプレーヤー。その選手に巨人が『プロテクト』をかけていなかった。恐らく『2億円超の選手を取りにこない』とみていたからだ。だが実際、広島が獲得した。時代の変化を表している。背景には一極化から多極化の流れがある」

―球団の収入源にも変化が生じている。

「多チャンネル化が進み、民放だけでなくCS、さらにインターネット中継もされるようになった。クライマックスシリーズの興行収入も主催球団に入る。収入源拡大で、広島が長野選手を獲得できるようになった」

―それはプロ野球にいいことなのか。

「新しいシステムがうまく機能していることになり、プロ野球の活性化につながる。一番よくないのが、選手の飼い殺しだ。選手を抱え込むだけ抱え込んでも、フィールドに出られるのは9人だけ。そうした意味で、長野選手のようなプレーヤーに新たな活躍の場があるのはいいことだ」



「野球の地位は不動。大リーグで日本人が活躍し、五輪競技になる前から、プロ野球には特別な人気があった」と話す江戸川大教授の神田洋さん

かんだ・ひろし　１９６６年東京生まれ。共同通信記者として松井秀喜氏ら多くの名選手を密着取材。２０１７年より現職。専門はスポーツジャーナリズム。

「対米追従」から最適化へ

―日本人にとってプロ野球とは。

「日本は文明開化でスポーツを導入した後、欧米に追いつけ追い越せでやってきた。オーストラリアン・フットボールはじめ、輸入したスポーツを自国用にアレンジする国も多いが、日本は違う。かたくなに技量を磨き、国際舞台で追い越そうとする。だからマイナーな競技でも五輪で世界一になれば、大きなニュースになる。そんな中、野球の地位は不動。大リーグで日本人が活躍し、五輪競技になる前から、プロ野球には特別な人気があった」

―日本のプロ野球は特殊だと。

「特殊な世界だ。日本の選手が世界で戦う前から『（王貞治、長嶋茂雄両氏の）ON人気』があったのだから。高校野球、大学野球で個々の選手が広く世間に知られていたという要素も大きい」

―そんな日本のプロ野球はどこへ向かうのか。

「世界舞台に躍り出た歴史が浅いからこそ、変わる可能性がある。大リーグを知るオリックスの田口壮コーチら元大リーガーが日本の球界に帰ってきた。こうした人材の存在は大きい」

―具体的に言うと？

「ＤＨ制の採用などルールは基本的に1、2年遅れで米国にならってきた。国際連盟主導の他の競技と違い、野球は大リーグの権威が圧倒的だが、どっぷり米国式にならないからこそ、新しく生まれるものもあるはず。これまでの『対米追従』ではなく、米国の野球を本当に知っている人こそが、単に形をまねるのではなく、日本流に適合できる」

―日本独自のスタイルを目指すと言うことか。

「そうだ。例えばコリジョンルールは、本塁上の激しい体当たりが多い大リーグが衝突防止に導入した。しかし日本でこんなプレーはもともとやらない。日本には昔から『暗黙のコリジョンルール』があった。大リーグが正しいという思い込みではなく、日本ならではの最適化が必要なのだ」